

瓢鮎抄（一二一） 尾池和夫

新藁を吹き飛ばしをり象の鼻
とりあへず桜紅葉の祇園まで
霜始降の候とて着重ねて
初霜を歩く先々消えゆけり
雄雌の数釣り合はずをり鴨の群
熔岩トンネル崩落の池凍りけり
角と角ぶつける牛に隠岐の冬
勝鬨橋は吾と同年年惜しむ

信貴山、法輪寺

水くくるとはと紅葉の品定め
縁起絵巻一卷よりの冬の旅
第二巻絵巻の童子冬もみぢ
転読の僧の美声と十二月
全経典あつといふ間ぞ冬の寺
紅葉且つ散るや人の世かくのごと
寅の日の虎の尾太し落葉道
信貴山や紅葉散り込む虎の口
法の字の三寺の塔と里の冬
堂冴ゆる飛鳥由来の鷓尾瓦